

訳者あとがき

彫刻家ちゆうこくかの父親とふたりきり、おだやかに暮らしていたのに、父親の仕事の都合で、覚えてもない母方の叔母おばにあずけられたエリザベス。内気な叔母との気詰まりな生活の中で、自分そっくりの少女の肖像画しょうざうがにひかれていきます。その絵の少女は、二〇〇年以上も前、アメリカ独立戦争のころにそこに住んでいた祖先、ズイーでした。エリザベスは、絵の裏に書かれた図の謎を解きズイーの運命うんめいに迫ろうと、偏屈へんくつな親戚しんせきとともに、古戦場にズイーの足跡そくせきをたどります。

二十一世紀のエリザベスの日常と並行して語られる十八世紀のズイーの物語は、一七七七年、アメリカの独立戦争当時、現在はニューヨーク州中部の町オリスカニーで行われた戦闘せんとう前後のできごとです。一七七五年、アメリカ東部のイギリスの植民地十三州は、イギリス本国の課税やさまざまな圧迫あつぱくに対して立ち上がり、アメリカ独立戦争が始まりました。しかし、植民地側が一致団結いっちだんけつしてイギリスと戦ったわけではありません。独立

国を目指してイギリス軍と戦った人々と、独立に反対してイギリス軍とともに戦った人々がいた、つまり、植民地の人々が敵味方に分かれて戦ったのです。

当時の植民地の人々の意識は、独立派（愛国派）が五分の二、独立に反対する王党派が五分の一、残る五分の二は中間派だったといわれています。先住民であったアメリカ・インディアンは、多くがイギリス軍、王党派とともに戦いましたが、愛国派に味方した部族、中立だった部族もいました。植民地の兵は、愛国派も王党派も、普段は農民として生活をしている隣人、隣り合った村人たちで、制服はおろか、武器も装備も訓練も十分でないまま戦いました。女性でさえ、ズイーのように、軍といっしょに戦場について行き、調理、洗濯、看護などで戦闘を支えることもあったのです。

私たちは、静かでさびしさの漂う二十一世紀の物語と、素朴な開拓生活の中にも不吉な予感のする十八世紀の物語が、どこでどうつながるのだろうと謎にひかれて読み進むうち、独立戦争のまった中に引きずりこまれ、まるで歴史の一場面に立ち会ったような気持ちになります。

不器用でうっかり者で容姿も平凡と、エリザベスそっくりのズイーですが、隣り同士敵

味方となつて戦わざるをえない独立戦争の状況が、ズイーを劇的に変えていきます。敢えて戦闘にとびこみ、自ら歴史を進めようとするズイー。そして、そのズイーの実像に迫ろうとする二十一世紀のエリザベスもまた、ズイーの強さを取り込むかのように、語る者としての才能に目覚め、自らを積極的に外に拓いていきます。エリザベスが発見したズイーという二〇〇年前のひとりの女性の生き方は、おそらく小説家になるであろうエリザベスの成長を、これからもいろいろな場面で助け支えていくことでしょう。そして、この物語を読んだ私たちをも。

考えてみれば、エリザベスのように劇的な祖先との出会いはなくとも、父母や祖父母から聞く昔の話や郷土の話に、私たちは無関心ではいられず、興味をかきたてられるものです。親しい人の口から聞くそんな話は、私たちの心に特別印象深く刻まれるものですが、どこかで聞いたり読んだりした赤の他人の話、いえ、何百年も前の昔話や遠い外国の話さえ、あるとき、ふっと心の底から浮かび上がってきて、私たちに何かを納得させたり、元気づけたりしてくれる、そんな経験はだれにもあるのではないのでしょうか。

私たちは、自分だけの経験と思ひ出だけをたよりに生きていくわけではありません。時

間や空間を隔<sup>へだ</sup>てたくさんの人の物語とつながって生きているのです。そう思うと、小説も含<sup>ふく</sup>め、物語を紡<sup>つむ</sup>ぎ語るといふ行為<sup>こうゐ</sup>が、そして、その物語に耳<sup>みみ</sup>を傾<sup>かたむ</sup>けることが、ますます大切な愛おしいことに思えてきますね。

もりうち すみこ